

情報化される「わたし」 -----

携帯メール作成における「予測変換」機能は、利用者の意図とは無関係に沢山の言葉を蓄積し思考の履歴を形作ります。館内各所に貼付けられたカードの文章は、一見、意味不明な言葉の羅列に思えますが、実は「予測変換」機能の使用頻度の高い語彙だけを並べたものです。それはまるで自身から勝手に抜け出した分身の仕業のように感じられることでしょう。



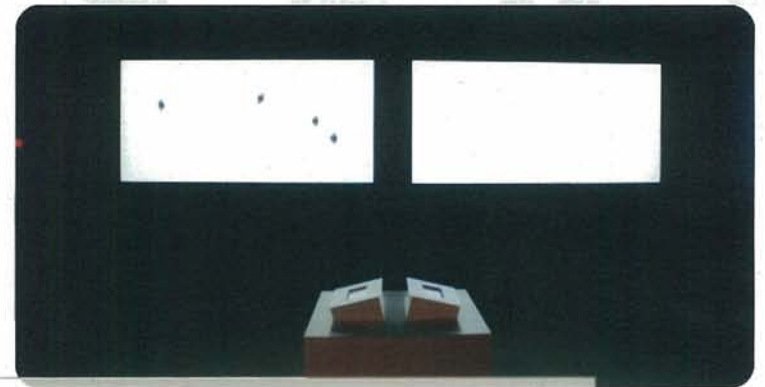
朝起きてから寝るまで、200人分の生活行動の記録が時間とともに変化するアニメーションとして映し出されています。人のいる場所の違いでその時どんな行動をしていたかの違いがわかります。多くの人が集まっている場所は、その時たくさんの人がしていた行動を表します。また、画面の人に触れるとその人だけを追いかけた映像が別の画面に映しだされます。



A day in the life



画面の中を動き回るたくさんのキャラクターの中に、自分が操作しているキャラクターが1人だけいます。自分が操作しているキャラクターを見つけ、旗まで誘導しましょう。旗まで誘導すると、あなたが操作しているものは別のキャラクターに憑依（POSSESSION）します。あなたは「あなた」を見つけることができるでしょうか。



二つのモニタの中をたくさんの小さな人が歩いています。一方の人は皆、影で実体が見えません。もう一方の人は皆、実体です。彼らを指でなぞると、その触感とともにモニタから消えて、別のモニタに姿を変えて現れます。体験者は人々を神様のような視点で眺めています。その人々の中には体験者と関連のある人が含まれています。

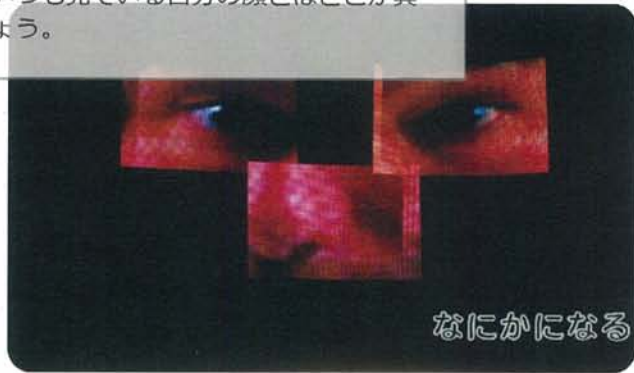
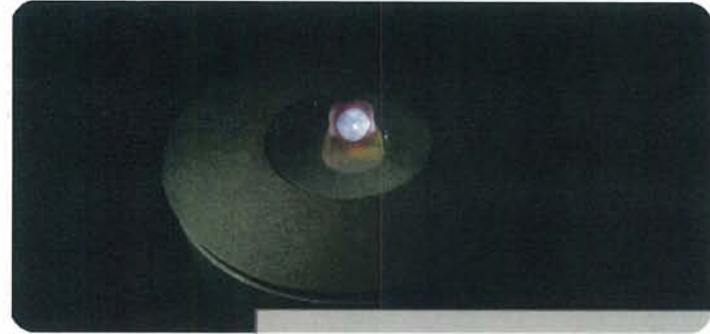
Parallel Lives



情報に消える「わたし」 -----

Eye remember you

はじめにあなたの顔写真を撮影します。撮影された顔は目・鼻のパーツに分けられ、それぞれ別のLEDディスプレイで表示されます。1列のLEDディスプレイは、その前で目を動かしたときだけ画像が見えるもので、一瞬しか見えない顔の断片から思い起こされる顔は、いつも見ている自分の顔とはどこか異なるものでしょう。



なにかになる「わたし」

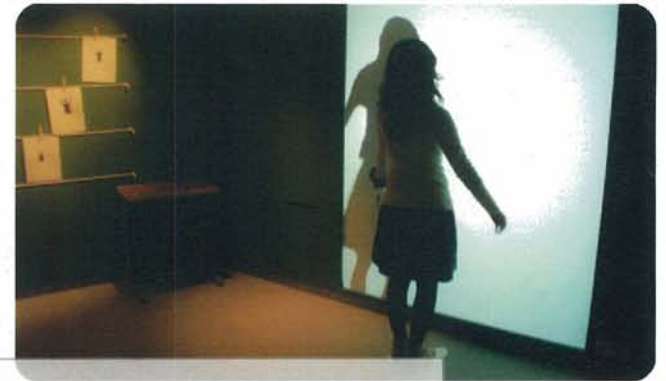


顔はその人を最も象徴する身体部位ですが、それが自分から離れて関係のない物の一部として使用されます。撮影された顔写真は様々な物と合成され、実在感の高い空中立体像として現れます。普段目にするものがない、自分の顔のついた物体に対してどのような印象を持つでしょうか。

聴診器を胸にあて、ヘッドフォンを通じて自分の心音を聞きます。そのとき目の前には、緊張している人の映像が流れます。映像に合わせて音の強弱が調整されていくなかで、だんだん、その音が自分の心音なのか映像の中の人の心音なのか区別がつかなくなってきます。自分の心音を映像の中の人と共有することで、他人の緊張感や心の動きを想像します。



「わたし」から生まれる<私>



普段、影は自分の身体と同じ形、同じ動きをします。しかし、スクリーンに現れた影は、自分の形をしていますが、意思を持って勝手に動き始めます。自分の身体から離れた影（影法師）に、どれほど自分とのつながりを感じることができるでしょうか。また、影法師はプリンタから印刷されて会場に貼られていきます。

